

浄土

1985-7

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 課外頁 (特別授受承認雜誌) 第三二五号
昭和六十年六月二十五日印刷 昭和六十年七月一日発行
第五十一卷 七月号



4手
林



七月の秀句

白扇や漆の如き夏羽織

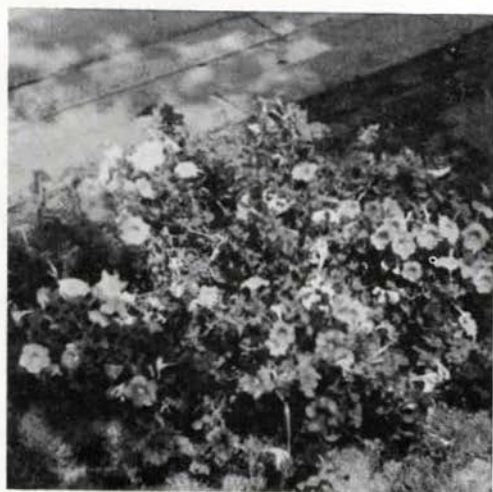
夏の雨きらりきらりと降りはじめ

汗ばみて余命を量りゐたらずや

高浜 虚子

日野 草城

石田 波郷



七月号



——の化仏にまた衆多無数の化菩薩ありて以て侍者とせり。

——『観無量寿経』真身観文

目次

法 話

往生はお心にあるべきなり……………小 俣 昌 雄……(2)

＝いのちをはぐくむ II＝

自然の人生……………小 西 祐 謙……(12)

ず・い・そ・う……「つくづく」法師抄

盂蘭盆会のあとさき……………真 野 孝 信 ……(7)

<連載> 一紙小消息 ①

いま時の極楽往生……………村 瀬 秀 雄……(18)

み仏とともに = 4 =

——み仏の身替り——……………安 居 香 山 ……(24)

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記(四)……………木 下 隆 一……(29)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第13回 ……………寺 内 大 吉……(35)

枯れ葉がまねく

挿絵 松澤 達文

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

往生はお心にあるべきなり



受け難き人の身すでに受けたり
あひ難き念佛の法門にあひたり
娑婆をいとう心あり
極楽をねがふ心おこりたり

弥陀の本願深し
往生はお心にあるべきなり

小 侯 昌 雄
お また しょう ゆう
(東京・品川区行慶寺住職)

この法語は法然上人から関東の津戸の住人三郎為守という人へ差し出されたお手紙の一節です。

津戸という所が現在の何処であるか明らかではありませんが、恐らくは東京西郊の武蔵野地方、府中から秩父あたりにかけての何処かの地でしよう。

為守は源頼朝の御家人です。法然上人との化縁は、建久六年三十三才の時、東大寺の落慶法要に臨む頼朝に随従して上落した折に結ばれたと伝えられています。既に寿永二年の平家追討の軍に加わって上落しているはずですから、その時に法然上人の教えに接して、それ故の入信といえそうです。

その当時、関東の御家人の中には、熊谷直実をはじめとして、法然上人の教えを頂いて念仏者となった人たちが少なくありませんが、為守もその一人といえます。

この為守について、法然上人よりのたびたびの書状を中心に『勅修御伝』は第二十八巻

全部を充てていますが、こういう例は、熊谷直実や関白兼実、二祖聖光上人などの人々の数例に過ぎません。重い扱いであることがわかります。

為守入信の動機は、合戦の非情さとその己が罪の深さに思い到つての故にと伝えられています。かの熊谷直実が叔父久下直光との骨肉の争いを通じて、それまで信頼して来た者への不信感から、それが法然上人の化導を頂く縁となつていきますように、為守自身についても、その身辺に不幸な出来事があつたのかも知れません。

為守からの書状の行間からも、為守がまわりの土地の者から余り温い眼で見られてはいなかったように見受けられます。

為守の最後を伝えるところでも、彼は、法然上人に先に逝かれた後は、年を追うて、この世間のことが厭わしく、ついに自分で腹を切つて、一種の捨身往生をしたように伝えられています。為守にとってこの世の心の支

えであつた法然上人に逝かれて後の、寄辺な
い孤独感がにじみ出ています。彼の後半生は
同信者三十余人と共に、自分たちの世界の中
で生きた人といえそうです。

こういう心情の人に対して、その心を力づ
けるように教示されたのが最初に掲げた法語
です。

もう一度法語を読んでみましょう。

私たちは、幸にして、仏性を具えた人とし
て生を受けることが出来ました。その親の下
に今生に生を得るということは、本人の選択
を超えたはからいです。この勝縁を大切に活
かすのが、私たちのつとめです。

浄土の法門は幸にしてわが国に於いて真実
の心をあらわし、今現に在るのです。その法
門のことを心に留めましょう。

世間であって、他人を傷つけ、自分も亦傷
つく修羅の世界の空しさに、幸にして私たち

は気がついたのです。

そして今は、只弥陀の浄土に於いて浄業を
修めたく、世間のことに退転し勝ちな私たち
の支えを願って、ひたすら、弥陀を念ずるば
かりです。

みほとけのお志は誠に深く、疑うべくもあ
りません。

このように、凡べての条件はととのつてい
るのですから、あとは、貴方の心ひとつにか
かっているのです。願往生の心をしつかり保
って、単信唯称の信と行へ一步をふみ出しな
さい、ということです。

確かに、浄土の法門は、仏教八万四千の法
門の一つであって、確たる願心をもって、ひ
たすら信じに信じて、ひたすらお念仏を称え
ゆくとくなくしては、この法門に入ること
は出来ないのです。

凡べての人に、時と処を超えて、平等に開

かれていますけれど、そこを行くのは、その人その人の信と行によるのです。

二祖聖光上人は『末代念仏授手印』というお書物の中で、往生し難き人について、事例をあげて説明されておりますが、自発の願心なく、信と行の伴なわぬ人は、所詮縁なき衆生です。

例えば、自分から歩こうとしない人には牛の貸しようがありません。幼な児が危なげながら懸命に歩こうとして、その一步をふみ出してこそ、介護の母親の手が働き、介護の心が活かされるのです。これは、増上縁の關係を示すもので、いかなる勝縁も、自分から自発の心をもって、一步をふみ出すことにかかっています。

この頃は、經典の解説や法話集などが数多く刊行され、佛教を語る集いや、写経、写仏の会も亦盛んです。こういうことは大変良い

ことですが、とにかく聞きかぢりに終り勝ちなのが心配です。やはり、その人なりに、実践を心掛けたならば、そこで、はじめて己を知ることになります。そして、そこから仏道は始まるのです。

聖覚の『大原談義聞書鈔』という本があります。そこで、法然上人は御自身について語りながら、

「自分は、四十才を越える所謂衰老のころに至るまで、あれこれと出離の要義について思いをめぐらし、工夫したけれど、その開悟は容易なことではない。

それで、自分の力量を推し量ることによって、浄土を願ひ、他力によって名号を称えることになりました。

まことに、この往生極楽の教行は、正しく、成佛して妙覺位に至る肝心の教であって、誰かこれに帰入することがありますように」

と仰せられていますが、そこには仏弟子として法然上人の姿勢が示されていて、その求道の志は、自づと私たちの胸を打つものがあります。体験を語る真実の重みです。

右のお言葉からも、浄土の法門が、自発の願心と信と行を大切にすることがわかると思っています。

往生は貴方の心ひとつにかかっているという、法然上人のお言葉はそのまま私たちの御教示と受けとめたいと思います。

この四月から、つくば科学万博が開かれています。先進技術の粋を集めた展示はすばらしいといえます。ただ精巧なロボットが余りにも正確に、私たちの能力を超えた働きをするのを見ると、却って無気味な感があります。勿論、機械は正確であることが身上です。しかし、それを使うのは人間なのですから、

その使い方が問題になります。

昔から「包丁も使いよう」といいます。料理に無くてはならぬこの利器も、時としては人を傷ける凶器となります。包丁そのものに変わりなくとも、その用い方で善悪両用の働きが生ずることになります。これを体と用の関係といいますが、そこで大切になるのが、「使い手の心」の問題です。

最近のように、情報が充満して、知らず知らずの中に、ものの考へ方や、生き方が定型化される時代だけに、自分の人生を生かしてゆく「使い手の心」が大切になります。

ひとりの人生は、その人が自分で一步一步、多くの支えを得ながら、歩みを重ねてゆくものです。そこには当然乍ら自発の心と、信と行が基になります。

万機普益の法門の利益は、他人まかせに横着をしては得られません。自分なりに自発の心をもって、浄土を願求してこそ、その道はひらかれることを心に止めましょう。

◇◇◇ず・い・そ・う・・・「つくづく法師抄」◇◇◇

盂蘭盆会のあとさき



真ま野の孝こう信しん

(八幡市正法寺住職)

古都保存協力税の問題で、市と仏教会の相互の対応が未解決のまま長期化して、文化人や経済界の代表をも巻き込み、愈大詰を迎えた今では、市民の間

にとどまらず、古都の観光に関心のある内外の人々の間にも、不信の声すらあがる嘆息まじりの話題をよそに、先月の八日には、はや古都に夏を訪れを告げる「コンチキチン」の祇園囃子のはしりが、月鉾

の町家から流れはじめたとかで、京都人らしい郷愁染みを覚える。

祇園祭は七月一日の「吉符入きつぎいり」から本格的な諸行事が行われ、十六日の夜には、流れる祇園囃子もいよいよ冴えて、山鉾の装ひも調い、見送、水引、胴掛の綴錦や刺繍、華毬等の東西の粹をあつめた豪華が、鉾の前後に駒形に吊られた名称紋入りの数十個

の提灯の火に映え、巡行の前夜祭とも云うべき「宵山」の風情、そして十七日鉢の巡行に及ぶ神幸祭へと運ばれる伝統行事の風流と華麗は、到低筆舌に尽し得ない現実を観る絵巻物の展開である。十七日から二十四日の還幸祭に至るこの祭は、具さには祇園御霊会といって、その名の示す通り、疫神や死者の怨霊を鎮め慰めるための斎会の伝承行事で、もとは仏式によって行われたと伝えられている。

七月と云えば七日は七夕祭であるが、「乞巧奠」の名の如く、上達を願う乞巧の意は、夜空にかかる天の川の東西の兩岸に相對峙する織女星と牽牛星の年に一度相逢うロマンを背景として、人それぞれの願望成就を、天の川を渡る舟蛇に托す相念から、秘めた思いを梶の葉に認める作為となり、長い歳月の推移の中に、更に所によって変化しながら、今も、その多彩な美観と盛大を誇る行事として、観光客を呼ぶ仙台の七夕飾りから、笹の小枝に吊した五色の短冊に、子供らしい願を記して軒端に飾る幼童のそれにといたるまで、季を告げる恒例の風物である。

然し何と云っても、私達仏教徒にとって、七、八

月は東西の盆会のものである。先づ、生盆について考えてみたい。盂蘭盆前の吉日を選んで、現に生きている父母の御霊に供養し、その息災を祝う行事で、「生身魂」「生身玉」「生御霊」とも書かれているが、盆と正月の二大節期に、都会に出て生活する人々が帰郷することを「帰省」或は「戴入」と称する意味合に、故郷入りをして父母の安否を直（直接）に問い、父母の気嫌を伺うと共に、自己の身心の有体を互いに確かめて、父母の日頃の配意に安心を請い、或は父母の好みに応じて供養する感謝の行事が含まれていることに併せて、所謂お中元御祝儀の贈答行事に、この生身魂の行事の一般化を察することができる。

盂蘭盆は盂蘭盆経に詳細な説示があつて、これも、土地がらや習慣に合せて、さまざまな附加行事が行われているが、期日は十三日から十六日に至る四日間が、その行事の期間であるが、所によって七月盆又は八月盆として行われている。盂蘭盆の名称は、梵語「ウランバナ」で、「倒懸」と訳し、死者の生前の足跡に徴して、その業障の軽重による受報

の相を、冥界の六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道）に配し、釈尊の十大弟子の中、天眼の通力（六神通Ⅱ仏、菩薩が修行の結果、その身に具えた六種の無礙自在な妙用力。——神足、天眼、天耳、他心、宿命、漏尽の六通）第一とされる目連尊者の、観想に認知された亡き悲母の存在は、まさに焰口餓鬼えんぐにして、飢渴の苦果に、太鼓腹の他は骨と皮の瘦せ身となつて衰え、飲食の類は口中において火と化し、焰口の患に叫喚されるを悲法して、救苦脱獄の法を釈尊に乞ひ、それに応答された仏説に基く追孝の法会が盂蘭盆会で、一定の期間、室に籠つての修行（安居）を満して、自己の罪過を懺悔、告白して修福の身となつた自恣の僧衆を供養して、三世の諸仏一切の三宝、過去七世の父母に山海の珍膳を供えて咒願じゆがん（願意を唱えて、その成就を祈ること）を乞へば、その功德によつて、『現在の父母をして寿命百年無病、一切の苦惱の患なからしめ、乃至、七世の父母をして餓鬼の苦を離れ、人天の中に生じて福樂極まりなきを得しむ』とする咒願の一節にもみることでできるように、祖靈祭祀の在来信仰と、仏教の自恣じしの修

行事が結合し、人間世界らしさの温りを覚えさせる恒例の伝承行事である。

十三日の「迎え盆」、十六日の「送り盆」の間にも、その日程に即した内容の伝承に、これを慣習する人の真心の滲みが感ぜられるのである。

精霊棚を設けて、先亡の精霊を迎えるのであるが、その家の仏壇を洒掃して、仏具の類を淨めると、これもまた恒例による十二、十三日の両日に立つ草市から、精霊供養の蔬菜や果物その他の用品を買い求めて、準備するのであるが、京都（八月盆）では、六道珍皇寺と称する臨済宗の寺があつて、通称では六道さんと呼び、精霊送り迎への入口と伝える古井戸が現存して、毎年八月の七日から十日の四日間に、精霊迎えに群参する信者は、現世と冥土の境界として、六道の辻と心得、冥土にその聲音が届くと伝えられる鐘をついての帰途、精霊まつりの用品を買い整えるのであるが、特に初盆の精霊迎えには、その遺族にとつて欠くことのできない精霊迎への寺のごとく、参詣人とテント張りの出店で、通り一ぱいの賑わいをみせるのである。

精霊迎えは、十三日も黄昏時となれば、民家の軒端の盆灯籠や盆提灯に火が点されて、いよいよ祖霊や先亡の霊を迎えるのであるが、このことに就いては、私の脳裡に消えぬ懐しい想い出がある。

それは、もう三十年近くもなろうかと思うが、家内の母が孫を膝の上に抱きかかえて、

「さあー、いよいよ今年も盆やなあ、盆が来たら、先祖さんが帰って来やはるのやでえ。あて（自称の京阪方言）とこの兄がなあ、着物を着替えて、扇子を持って、『さあ、先祖さん迎えるでえ』ちゅうて（……と云うて）家中の者に声をかけて、仏間の入口に坐つてな、『ようこそお帰りやす。さあ、どうぞお上りやす。むさくるしうしてますけど、きつくりしとくれやっしや』ちゅうて（と云うて）、扇子を前に置いて叮嚀にお辞儀して、ご先祖さん迎えるにやで」と京言葉訛で、自分自身が想い出を味わいながら、話し聞かせていたのが今更に懐しい。その時、膝の上に抱かれて、意味の解らぬ話を、その話し声を、自分をあやす言葉がけのように聞いていた孫も、今では、二児の親となり、話して聞かせた祖母の七回

忌が今月で、帰って来られる精霊仲間の一霊である。盂蘭盆の話などは、和尚の説教より、祖母が孫に話し伝えるのが味深く思える。その方が、ふさわしくもあり、意義もあるのではなからうか。

和尚が各戸の精霊棚にお経を唱えて廻ることを棚経と云うが、『棚経や声の高きは弟子坊主』（其角）で、それは、弟子坊主にとつては、恰好の習練の場であると共に、酷暑の中を数多く戸別に廻る老僧にあつては、弟子の大声は、読経の声の援助ともなつて、大いに助かるのである。兎も角、この棚経こそ、目連尊者の故事に倣う戸別の行事で、百味の飲食を供えて、祖霊や先亡一切の有縁の霊を供養し、その勝縁をいただいて、家庭と一族の和楽と弥栄の基に資し、各人はそれぞれに生涯の有意と活性の源を、祖孫一貫の生命の尊貴なるに発するの自覚を呼ぶものと致したいものである。更にこれを人界の全てに及ぼす平等の利益となすことが、仏慈と祖恩に報答する道であることを思えば、有難い行事として伝承されるのであらう。

ここで私は、盆会中の精霊供養についての古例の

伝承を記して、その献立について考えてみたい。精霊への供物は、全てを一枚の蓮葉に盛るのは、泥中に在っても、常に淨域を保つ蓮葉に、仏界の穢れを断絶した蓮台に倣つての表意であらうか。十三日の薄暮に火をたいて迎えた精霊には、団子を供して、これを「迎団子」と称し、十四日には、茄子と瓢との胡麻和や芋茎和等の手のこんだ馳走をもって饗応し、十五日には白い強飯を蓮葉に包んで供え、団子を添えて「送団子」とする。この他には、日を選ばずに百味五果や、茄子や瓜の刻みに洗米を混じて水鉢に入れて供する等のある中で、十五日の蓮葉に包んだ強飯は、携帯弁当として、精霊は善光寺参りで、棚は留守として、早朝と夕方以後を除いて、その供養を略すならわしとなっているのは、供養者の休日当てるための智慧の所産とみてよいのであらうか。

盆会を通して、その教説は、私達に人間らしい生活の道本を示し、温い情誼を呼ぶ人倫教導の伝承行事である。

(つづく)

◇“浄土句集” 欄投稿要項

多くの方々のご投句をお待ちしております。お仲間の方々も広くお誘い合わせ、一句でも多く投句して下さい。大本山善導寺のご法主でもあられます一田牛畝先生に選者をお願いしておりますので、ふるって作句して下さい。

一 ハガキ一葉に四、五句づつ、あるいは封書に何句でもお書き下さい。

一 投稿先――

。千839―11 久留米市善導寺町飯田550

大本山善導寺 一田牛畝先生宛

。千812 福岡市博多区中呉服町10―14

正定寺 一田牛畝先生宛

。千102 東京都千代田区飯田橋1―11―6

法然上人讃仰会

(法)

(話)

いのちをはぐくむ

自然の人生



小西祐謙

(上宮高等学校副校長)

○柳は緑

四月の桜はほんの暫く、すぐ新緑の好季となり、一日一日緑が深まる。緑色は、なぜか心が安まる。

自然を描いて他の追従を許さないと評される徳富蘆花の「自然と人生」には、

青葉のころその林中に入りて見た。葉々ようよう日を帯びて、緑玉、碧玉、頭上に蓋を綴れば、わが面も青く、もし仮睡うたたねせば夢また緑ならん。(雑木林)

と、春の翠^{みどり}を謳^{うた}っている。

夢また緑——自然の中に、心が溶け込んでいる。

五行説でも、緑色、青色は、春、東の字にあてられ、「青春」とか「東宮」「青宮」「春宮」(皇太子の別名)などの用い方に見られるように成長の姿を表している。

「青」という字の成り立ちを見ても「生」の字と「丹」の字の合成といわれ、丹は今ではアカ(朱)の意味に多く用いられるが、元々は顔料染料の鉱石を意味する字で、それが広く色を表す意味に用いられるたうになったものらしい。生は草木の茂る意。そこでこの二つの合成の青の字は、茂る時の色即ちみどりを意味するようになったといわれる。

青い色、草の色、みどり色は、まさしく成長の姿を表しているのである。

そういう意味で、春は万物誕生の時であり、成長の時期である。

緑の大自然に素直に目を向けるとき、自然の中に自分を投入し、その大生命を体全体で感じることの出来る好季であると言ってよいであろう。

徳富蘆花は、次のようにも言っている。

自然は春においてまさしく慈母なり。人は自然と融け合い、自然の懷に抱かれて、限りある人生を哀しみ、限りなき永遠を慕う。すなわち慈母の懷に抱かれて、一種甘えるとき悲哀を感じずるなり。

ここでは、人は決して自然と対立してはいない「自然と人生」というより「自然の中の人生」と言った方がわかり易いであろう。



私たちが、若葉の新鮮な色を見た時、どう感ずるだろうか。そこに何を感じとるであろうか。美しさ、爽やかさを十分に満喫する人は勿論たくさんあろうし、中にはハッとするような何かひらめきに似たものを感じる人もあるに違いない。



自然と人間、自然と文化という言葉の意味するところは、旧約聖書のエデンの園の話を考えてもわかる通り、全く自然の一部であった人間が自然の中で独立をして一つの新しい世界をつくったことから生まれたものである。聖書では、神が天地を創造し最後にアダムを造り、イブを造られた。その当初、あったのは自然だけである。ところが、二人は神の意に背いていわば自然から独立をするハメになった。ここで、自然と人間という二つの概念が生まれるのであるが、この人間の独立たるや、自然を離れてひと時も存在し得ない存在でありながら、錯覚して時には自然と対立しようとする。まことに不遜というほかはない。しかもその不遜さが、実は人間を自然から独立せしめた知恵の然らしむるところとなれば、その愚かさについては何とも言いようがない。だから、私は「自然と人生」ということばを実は余り好まないし、むしろ「自然の中の人生」更には「自然の人生」と考えたいのである。

○いのちを感じる

青葉若葉の話を持ち出したのは、今が緑の美しい季節だからであるが、それよりも、自然に接する中で「いのち」の躍動を感じるからである。

人生には、感動がなければならぬ。感動のない生活は死である。大自然に接した時の大きな感動も、それこそ生きているあかしであり、「いのち」についても、この感動あってこそはじめて生きたものとなる。

「生きた生命」である。

「いのちを考える」といっても、考えるだけでは生きたいのちとはならない。

考えてわかることも勿論あるが、考えても解けぬことがあり、考えるからわからないこともある。

考えることが契機となって、大きな感動につながってこそ意味があると思う。

自然とは、「法爾自然」ということばがあるように、極くあたりまえ——無理をしていない状態をいう。山がそこにあり、川が流れ、海が広がり、陽が沈む。柳は緑で、花はくれない、鳥がさえずる。それが自然というものであり、そこには人の力は及んでいない。

法然上人が、十八歳の時に遁世の志をおこして比叡山元黒谷の叡空上人の門に入られた時、師の上人が「まことに法然道理のひじり」と「法然」という号を与えられたと伝えられているが、

まことにふさわしい御名と申し上げる外はない。

文字で見ると、「法」という字は、低きにつく水を支える堤防の縁、すなわち則を表わし、そこからきまり（法則）という意味に用いられるようになったもの。「然」は、燃えるという意味からできた文字である。

だから、法然上人のみな「焰は空にのぼり、水はくだりさまに流れる。果物の中に酸いものあり、あまいものあり、これらは法爾の道理である」（口語訳）という有名な御法語の通りである。法然という御名を見るたびにこの御法語を想い出して、法然ということについてしみじみ思うのである。



人の手が加わると、新しい文明が生まれるが自然は遠くなり勝ちである。だから文明の時代のわれわれほど、自然の中に人生を見る眼を養わなければならない。「いのち」についても、頭の中で概念的に考えるのではなく、日々の生活の中で、実感として、大きな感動として受けとめることが出来、味わってゆくことが「いのちを生かし」「いのちを育てゆく」前提となるであろう。

○猫の眼

真実を知ろうとするとき、有効な手段の一つは、観点を変える、角度を変えて、見ることである。

見るのは、目ではなく、心による。

同じ家に住んでいても、人と猫とは別々の景色を見ている。

猫の目には、家の構造にしても天井は高く、足もとから見上げる子供さえ聳え立った巨大な生きものと映るにちがいない。私たちが街を歩く場合でも、われわれの眼の高さはほぼ限られた範囲であって、犬の見る街の情景とはおよそ違ったものであろう。同じ街中でも、真夜中や明け方の景色は普段私たちの知っている街の姿ではない。

思い切って観点を変え、視角をかえることで新しいものが発見できるであらう。



近頃、書店に行つて特に感ずることは、出版物の驚くほど多くなつたことである。仏教をはじめ宗教書についてもその増加ぶりは特に目立っている。

あれだけ人生のガイドブックがありながら、人心の治まらぬのはなぜであらうか。本はあつても、読まなければ何もならぬし、読む心、受け取り方が問題であらう。

仏教の説くところには、日常の私たちの生活になじまないものが沢山あらう。しかし、そのなじまない所に新しさがあるといつてよい。なじまないから古いのではなく。だからこそ従来とは違つた新しい考え方がその中に発見できるのである。

「仏教の眼」で一度見直してみなさい。そうすれば娑婆は娑婆ながら、日々の苦勞や煩わしきは煩わしいままに、今に生きることの意義を見出すことができるでしょう。

法然上人をはじめ多くの祖師は、そう教えておられるのである。

一紙小消息

①

いま時の極樂往生



村瀬秀雄
むら
せ
ひで
お

一紙小消息とは、一枚の紙に認められた短い手紙ということである。消息は普通に動静という意味であるが、当時は手紙を消息ともいっていたようである。天台座主の顯真（一一三〇—一一九三）は文治二年（一一八六）秋に京都市左京区の勝林院で行われた一日一夜にわたる大原問答の後で熱心な念仏行者となったが、その後に叔母の禪尼に念仏を勧める手

紙を送った。その手紙が世間に流布して、眞の消息と呼ばれていたという。また一枚起請文は一枚消息とも呼ばれていた。その他消息と呼ばれて今に残っている手紙は、親鸞や日蓮にも多くある。その内容からみて消息は単なる手紙でなく、教えを伝えた書簡であるといえるであろう。それならこの小消息は誰に送った書簡であるかという、ただ黒田の

聖人へつかわす御文と伝えるだけで、その聖人が誰であるかは判っていない。しかし一応の説としては黒田は三重県にあった黒田庄であり、聖人は東大寺再建に勸進職として活躍した俊乗房重源（一一九五）であつたであらうといひ、または重源の弟子の行賢（生没不明）であるまいかともいわれている。

小消息は一枚起請文とともに二大法語といわれ、いわば念仏法門の奥義書といつてもよい。何れも念仏の信と行とを簡単にして完全に明かしているが、どちらかといへば小消息は「信じても猶信すべきは必得往生の文也」と結ばれているので信に重きをおき、一枚起請文は「只一向に念仏すべし」と結ばれているので行に重きをおいているともいわれている。しかし信と行とは車の両輪であつて、どちらかに重い軽いがあつてよいものでない。信がなければ舵のない舟であり、行がなければ船頭のいない舟のようなものである。然然上人は常に仰せられていた。

「念仏の功德を聞いても信じなければ、初めから聞かなかつたのと同じことであり、たとえ信じても念仏を唱えなければ、信じていないのと同じことである」（勅修御伝第二十二）
またこうも仰せられていた。

「一念十念の念仏で往生できるからといって念仏を疎略に唱えるのは、信心が修行を妨げているのである。念々に捨てることなく念仏を相続するようにと説かれているからといって、一念の念仏では往生できないであらうと考えるのは、修行が信心を妨げているのである。信心では一遍の念仏で往生できると固く信じ、行では生涯を通じて念仏の相続に励まなければいけない。もし一遍の念仏では往生できないと思つていれば、一つ一つの念仏がすべて往生を信じていない念仏となる。阿弥陀仏の本願は一遍の念仏を唱える毎に必ず往生させると誓ひ給うているのであるから、念仏の一声一声が必ず往生できる修行となるのである」（同上）

小消息はまず、

「末代の衆生を、往生極楽の機にあてて見るに」

の一句から始まる。末代は仏法の衰えた末世であり、末法の時代のことである。衆生は仏の救済を待っている多くの人々のことである。機は機根のことで、仏道を修行する者の素質と能力と環境のことである。あてて見るにというのは、これらの人々を念仏往生の本願にあてがってみるとという意味である。

釈尊ご一代の説法に八万四千の法門があるというのは、誰でもその中から自分に適応した法門を見出すことができるということである。法門の中には聖者のための教えがあり、凡夫のための教えがあるから、どの法門が自分に適応した教えであるかを考え、よく選んで修行することが大切である。それにはまず自分がどのような時代に生きているかを弁えずなくてはならない。時代を分けていえば釈尊

ご入滅後の五百年間は教えと修行とによって悟りを得る者が多く、仏の教えが完全に具っていた正法の時代であった。その後の千年間は教えと修行こそあっても悟りを欠いた像法の時代であった。更にその後の一万年間は教えがあっても正しく修行する者がなくなった末法の時代である。釈尊のご入滅を紀元前四八六年とすれば、像法の時代は長和四年（一〇一五）で終り、その後は末法の時代ということになる。しかしどの法門を選ぶかは修行者の自覚と信念によるのであるから、ただ暦の上で年代を区切ってみても仕方がない。道綽禪師（五六二―六四五）は十三歳の時に北周武帝の排仏という法難を体験した人であるが、安樂集の中で当分は末法であり、現に穢れきった悪世であると述べている。その上で、だからこそ浄土門だけが広く遠く通ずる法門であると説いている。末法燈明記は伝教大師（七六七―八二三）の撰述とされているが、その中に今や持戒も破戒もない名ばかりの僧し

かいないと記している。恵心僧都(九四二—一〇一七)の往生要集は、往生楽極の教えと行は濁れきった末代にあってこそ最も大切な法門である、という一句から説き始められている。これらの先師は、何れも現に末法であるという認識の上に立って教えを説いたわけである。

法然上人(一一三三—一二二二)は、まさしく動乱の渦まく悪世の中にあつてご一生を過ごされた。この時代の僧も俗も権力のために争い、栄枯盛衰に目の奪われるものがあつた。上人ご誕生の長承二年には延慶寺西塔の学徒と中堂の僧が争い、その翌年には洪水と飢饉があつて疫病が流行した。上人五歳の保延三年には興福寺僧徒と伊勢神宮神人の強訴があり、その翌年に延暦寺僧徒の強訴がある、翌々年にも延暦寺僧徒が園城寺を焼く騒ぎがあつた。嵯峨清凉寺にご参籠になった上人二十四歳の保元元年には保元の乱がおこり、皇位継承問題が纏れて藤原頼長と忠通が争い、平家と源

氏の一門が兩派に分れて戦つた。上人二十七歳の平治元年には平治の乱があり、平清盛が源義朝を討つて平家の政権を確立した。しかし上人四十五歳の治承元年には平家打倒の鹿ヶ谷事件があり、四十九歳の寿永二年には木曾義仲が京都に入つた。その翌年には一の谷合戦となり、そのまた翌年には平家の滅亡となり、京都の大地震と疫病流行があつた。上人六十歳の建久三年には頼朝が征夷大將軍に任じられて鎌倉幕府を樹立した。そして上人七十五歳の建永二年二月二十八日に上人流罪の宣言が下つたのである。

このような時代にあつて苦難を強いられていた人々は、法然上人の念仏の教えを聞いてどの位喜んだことであつたらう。念仏の法門が燎原の火の如くに拡つたというのも、人々がまさに待っていた教えに出会つたからである。法然上人は大原問題について、弟子の信寂房(一二四四)に次のように仰せられている。

「大原の勝林院で聖道門と浄土門との論議があった時に、法門の教義については互角の議論で優劣がなかったが、修行する者の素質と能力という点において源空の論が勝った。その時に次のようにいったのである。

『聖道門の教理は深遠であるといっても、時代が過ぎ去った今となつては修行し難い法門である。浄土門の教理は浅いように見えるけれども、今時の誰にでも適応した行である』と」(信寂房に示される御詞)

それなら昭和の今はどうか。例えば劫濁は饑饉、疫病、兵災がおこる濁った時代のことである。現に饑饉がなくて食糧に不足がないが、衣食が足りて礼節を知っているといえるであらうか。親子の断絶と家庭の崩壊、学校内の暴力、老少の区別のない自殺等はどうして起るのであらうか。疫病の流行こそないが、試験管ベビー、臓器の移植等による医学の行き過ぎが生命の軽視とならなければ幸いである。戦争による兵災こそないが、

ゲリラの狂乱、暴力団の抗争、無差別殺人、放火等がある。それにも増して大切なことは仏法の弘通であるが、今の世において、どの程度に浸透しているかについて自らよくよく考えなくてはならない。こうして現代は、まさしく末代の世相を現わしているとみなくてはならない。

このような末代にあつては、仏助け給えと願つて念仏を唱え、極楽往生を願う教えしかないのである。それとも外に思い煩うことなく暮してゆける仏法の修行があるといえるのであらうか。そのためにもう一度念仏往生の本願を味わなくてはならない。無量寿経には、次のように説いている。

「もし私(法蔵菩薩ご自身)が仏になつたならば、十方の世界にいる人々が至心に信樂してわが国に往生したいと願ひ、乃至十念すれば必ず往生させるであらう。もしこれができなければ、私は仏にならない」

十方の世界の人々とはあらゆる人々という

意味であつて、その者に知恵や学問があつてもなくても、善行の多い少い、悪行の多い少ない等は一切区別しないのである。至心に信樂するとは、真実の心から素直に深く信じて喜ぶことである。乃至十念は下至十声ともいわれ、生涯を通して念仏を相續する者から臨終に十声一声の念仏を唱えた者に至るまでということである。

法藏菩薩は自ら「たとえどのような苦難にあつても努力精進し、忍耐強く修行に励み決して途中で後悔しないであらう」との決意を申されたが、その通りに修行を重ねて遂に阿彌陀仏になり給うた。阿彌陀仏が現に極樂淨土にましまして説法し給うていることが、念仏を唱えれば必ず往生できるという確かな証拠である。このように信じて念仏を唱えるには、どのように心得ているべきかを以下述べるわけであつて、ここに挙げた初めの一句は小消息を通じての序分に当る。

(く) (く) (く)

村瀨 秀雄 著

|| 好評新刷 ||

三部仮名
鈔の全訳

『念仏の要諦』

B 6判 二九七頁 価二九〇〇円

|| 好評 ||

『和訳浄土三部経』

B 6判 四七四頁 価二五〇〇円

『和訳法華選択集』

B 6判 三八七頁 価二五〇〇円

『和訳善導大師観經四帖疏』

B 6判 五八四頁 価三五〇〇円

『和訳善導大師六時礼讃』

B 6判 二六五頁 価二四〇〇円

『全訳法然上人勅修御伝』

B 6判 八四七頁 価六八〇〇円

取扱い 法然上人讃仰会

み仏とともに

=4=

—み仏の身替り—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

もう春も近くなった近江の里は、まだ残雪もあり、寒い比良おろしが吹いていた。緋の綿入れの着物を着て、ブクブクにふくれていては、子供の活動も自由でなかった。小学校の前の道には、小さな土手があった。カバンを提げて、友達らと帰校している時、私はこの土手から滑り落ちた。

丁度その時、運悪く馬力の車が通りかかり、私の足は後部の車輪の下敷きとなった。この頃ではもう見かけなくなったが、この馬力車は、四つの車輪で支えられており、後部車輪は直径が一メートル程もあり、鉄の輪がはめられていた。空車でも、相当の重量であるが、当日何を積んでいたか、記憶にはない。

「安居君が車に轢かれたぞ」

友人達は大騒ぎで、教員室に駆け込んで行った。担任の先生が飛んできて、ぐったりしている私を抱きかかえ、村の医者にと運んだ。わが家に連絡してくれたらしく、母がかけてきた。

その当時、子供たちは足袋をはいており、右足の親指

の所に、真赤な血がにじんでいた事は、いまだに覚えて
いる。

「馬力に轢かれたにしては、骨も折れてないでよかつたね。親指のなま爪は、はがれているがね」

村の医者は、私の足をさすりながら、母に語っていた。そして、薬をぬり、包帯をしてもらい、母の背に背負われて、わが家に帰った。その前後の記憶は、それ程はつきりしていないが、それからしばらくの間、母に背負われて通学したのを覚えている。友達に見られるのが、はずかしかったので、よく覚えていたのである。



— 立像 —

幸い骨折もなかったせいもあって、一週間程で、自分で学校に行けるようになった。ただ生爪はその為にとれてしまい、次のがでてくるのに相当時間がかかった。その為か今でも親指の爪は、変形したままである。

その後私は、三月も終りに近い頃、盛大な送別の宴を親戚一同集った所でやってもらい、リヤカーに乗せられて、稲枝駅まで行き、父と共に、京都に向った。リヤカーには、柳行季が一つ乗っていた。私の寺入りの荷物であった。

村の多くの人びとが、鎮守の森まで送ってくれた。リヤカーには、白い旗が立てられ、旗には私の入寺のことが書かれていた。父母達の喜びが、こうした所にもあらわれていた。稲枝駅で汽車に乗った時、親戚一同は「万歳」を唱えて送ってくれた。丁度それは、後年私が、やはりこの村から出征する時の風景と同じであった。私が京都の寺に入るといことは、村全体の大きなできごとであったのである。

○ 私が無事京都の寺に入った後、父は、私が馬力車に轢

かれながら、骨折しなかったのが、不思議でならなかった。

「もしや、み仏が、身替りをして下さったのでは、あるまいか」

ある朝、父はふとそんなことを思いつき、仏壇のみ仏



——上田純教上人像——

を外に出してみた。私の家の仏壇には、二体の立像の阿弥陀如来像が祀られていた。三〇センチ程の立像である。一体は本家のもので、次男である父が預っていた。本家は、アメリカに開拓農民として、移民していた。それと同じ高さの立像が、分家としての持仏であった。

父は、この二体のみ仏をだして、立像の両足を念入りに調べた。所が、どうであろうか。分家のみ仏の右足が、ベチヤンコにつぶれているではないか。それは、私が轢かれたと同じ部分であった。目を疑った父は、何度も目をこすりながら、見直した。間違いなく、足はつぶれている。

「おい、一寸来てみなさい。この仏さんの足はつぶれていないか」

大声で呼ばれた母は、何事かと飛んできた。そして、父にいわれて、母はみ仏の足をのぞき込んだ。確かに足がつぶれている。

「ほんとにつぶれていますよ。寺のおっさんに一度見

でもらったら」

父は飛ぶように寺に行った。早速、常光寺の上田純教上人がこられた。

「間違ひなくつぶれているなあ。不思議なことや。有り難いことや。南無阿弥陀仏」

そんなわけで、この事は村中の評判になり、一日この身替り本尊を拝みたいと、近郊近在から人びとが、ひきもきらずやってきた。

「伊三郎さんは、み仏に守られたのや」

誰いうとなしに、そうした事が村の評判となり、言い伝えとなつてしまった。折しも昨年のことであつたか、村の小学校の同窓会が開かれるというので、私も五十年ぶりにこれに参加してみた。五十年も会わないので、誰がどれやらお互いに分らなかった。ところが一人の友人が、

「あのみ仏に身替りになつてもらつた、伊三郎さんかえ」

と、まじまじと私を見て、漸くお互いが分つて、手を握り合つたことであつた。村の人びとは、私と、身替りみ仏とを結びつけて、今もこれを覚えているのである。私は今更のように驚いた。

奇蹟ということがしばしばいわれる。私のこのできごととは、確かに奇蹟といえるであらう。この奇蹟を信ずるか否かは、人それぞれの考え方であるが、私は、この奇蹟を今も信じている。そして、不思議にみ仏に守られたからこそ、この私があるのだと有り難く感謝している。

このみ仏は、その後、仏具屋に修理されて、田舎の仏壇に祀られている。そして、もう一体の本家のみ仏は、今、私が住んでいる目野の裏手の小さな本堂に祀られている。わが家のささやかな本堂ではあるが、貴光寺と名づけられたこの堂には、それなりのいわく因縁、故事来歴がある。それはまた、後に述べることにしたい。

幼かつた私は、こうした身替り本尊の来歴を、後日、

父から詳しく聞かされた。み仏の足は、そのままにして置いて欲しかったと思つたが、父にしてみれば、そうもできなかったのであらう。私が改めて見せてもらう時には、何処にもそうした変化はなかった。

そんなこととは露知らず、私は父と京都に上り、寺町の阿弥陀寺の小僧として、新しい生活を始めていた。しかし、それは、私のあこがれの京都には違いなかったが、その生活は、想像していたとは違い、大変なことであつた。

考えてみれば、まだ十歳になつたばかりの子供である。そして、わが家では、わがまま生活一杯をしてきた腕白小僧であつた。朝は友達がさそいにくるギリギリまで寝ていて、大急ぎでめしを食い、飛びだして学校に行くという生活をしていた。

そんな子供の私が、他人の家で、朝五時頃、起床するのであつた。それから、掃除があり、朝の住職とおつとめがありで、大変なことであつたと思う。しかし、そうした記憶は、遠い昔のことで、しかと私の記憶として残っていない。

ただ、まだ暗い中に、真黒な丈六の阿弥陀様に、おぶ

きを供えに行くことのこわかつたことが、強く印象に残っている。

阿弥陀寺は、織田信長の墓所の寺として有名で、その本堂の阿弥陀如来は、丈六にも近い坐像で黒々としていたように記憶している。或いは、あまりのこわさに、そう見たのかも知れない。ともかく、子供心に、朝の本堂行きは、余程おそろしかつたと見えて、今だに私の記憶の中に残っている。

私も二人の子供の親であるが、子供が十歳になつたとき、

「こんな年頃に、京都に修行にでかけたのだな」

と、つくづくと吾が子を見たものである。

そうした小僧生活が、毎日いろいろと展開していった。父母が言っていたことと、大分違った苦しいものであつた。それでも、どうか日は過ぎて行つた。

(つづく)

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記（四）

— 敦煌（その一） —



木きの
下した
隆りゅう
一いち

（隨筆家）

九月五日（一九八四年）、この日の出発は、殊の外早かった。佐藤孝雄君の記録によると、五時十七分にバスは金城賓館を出ている。以下、彼の克明な記録の中から極く大雑把に拾うと、敦煌までの航程は次のようになる。

六時三十分蘭州空港着。空港内の食堂で朝食。七時三十六分離陸。九時二十五分嘉峪関かよくかん空港着。給油の後、十時十四分離陸。十一時八分敦煌空港着。

改めて記録を読み返すと、様々なことが頭に浮かんで来るが、先ず最初に思いつくのは、ご婦人方は、朝の支度が大変だっただろうということである。男は歯を磨き顔を洗えば、後は着たきり雀でも



——敦煌飛行場に続くゴビの広がり——

どういうことはないが、女性はそうも行かない。おそらく三時半頃には、皆さん起きられたのではなからうか。朝食は何を食べたか、全く覚えていない。悠長に食べていられる時間はなかったから、トーストにジュースといった簡単な物であったと思われる。大きな空港らしいが、薄霧にとざされていて、その規模は判らなかった。ただ、ところどころに、昨夕の夕立の名残が水溜りを作っていたのが印象的だった。

乗機は我が国のYS11型に似た、中国民航機である。ソ連製のイリュシン18型という機種であろうか。座席数も機内の造りも殆ど違いはないが、前の座席に膝が当って、膝に痼疾を持つ私には堪えられないことであった。その点、YS11の方が幾分ゆとりがあったように思う。お国振りか、機体も爆音も、やや純重な気がしないでもなかった。

薄霧を突いて上昇すると、上空はよく晴れていた。通路際の席だったので、地上のパノ

ラマを見ることは出来なかった。時たま機体が傾いた時、ちらっとゴビを挟って走る乾河道が見えるだけである。大あり小あり、或いは合し、或は離れ、くねくねと縦に走り横に流れ、勝手気儘としか言いいのない紋様を、地平に刻みつけている。まさに造化の妙である。

左手に祁連山脈の雪を頂いた峰々が見え始めた頃から、乗機は徐々に高度を下げて、約一時間五十分の飛行で嘉峪関空港に安着。タラップを降りる時、急に立眩みがして、思わず手摺を掴んで息を整える。「いかなあ」——悪い予感が頭をよぎると、途端に動悸が激しくなってきた。朝、目が覚めた時から、なんとなく足元が覚束なく、歩行に支障はなかったが、雲を踏んでいるような感覚が、絶えず体を支配していた。もともと千メートル以上の高地では私の血圧はいつも変調を来たすのであるが、今回は夏風邪が直りきらぬうちにやって来たので、それに一層拍車をかけたようであった。待合室のソファにうずくまって胸を押さえていると、大学の後輩であるG君がお茶を持って来てくれた。

「先輩どうしたんです？ 元氣ないですね」

「うん、まあ、ちよっとね……」

返事にならない返事をして誤魔化すが、動悸は一向に治まらない。「こりやあ駄目だ。午後の市内見物は降りよう。もし途中で倒れるようなことがあっては、ご迷惑をかけることになる」——私はこの時点で、早々と敦煌の市内見物を諦めた。

程なく乗機に戻り、離陸。敦煌空港に着いたのは、前記の通り、十一時八分であった。

——敦煌第一印象——

ゴビの端に、敦煌の飛行場があった。滑走路と誘導路と、風向を示す吹流しが無かったら、誰も飛行場だとは気付かなかったに違いない。煉瓦を積み上げた空港の建物に入ることもなく、導かれるままにバスに乗り込む。日本製のマイクロバスである。ふと、バックミラーに写った己が顔

を見て、私はギョツとした。日本を發つた時の顔ではなかったからだ。沙漠の果てに消えて行つた、名も無き民の末裔がいる！と私は思った。或る時は黒潮に乗つて来た海人族の裔かと思ひ、また或る時は空から降りて来た天孫族の裔かと思つたこともあつたが、いままたここに、沙漠に消えた名も無き民の末裔かと……。一体私の祖先は何なのだろう。空氣が乾いているせい、やたら喉が痛む。冷たい啤酒が飲みたいと思うが、それは無い物ねだりというやつだ。何故か、残念ながら、中国には啤酒を冷して飲むという習慣が無いのだよ。

空港からしばらく北上すると、道は大きい道路にぶつかる。安西と敦煌を結ぶ安敦公路である。左折して、両側にポプラ並木を配した黒光りのするアスファルトの道を、バスはひた走りに走る。途中何回となく、野菜を満載した軍関係のトラックと出会つたが、お互いに道路の真ん中を走つていて、譲る気持はさらさらないらしく、クラクションを鳴らしづめに鳴らして警告を發しながら、間一髪と云つた感じで擦れ違つて行く。最前部の席で、8ミリの撮影に余念の無かつた紀野一義先生は、何度も肝を潰されたことであらう。

安敦公路は畑地を分断して、西へ西へと伸びている。この道に沿つて、防風林に囲まれた土屋の民家が散在し、それぞれ収穫の後始末に追われていた。そんな民家の中庭を、鶏がけたたましく走り廻り、大きな黒豚がノソノソ歩いている。実がはじめて白い綿花を吐いている綿畠には、腰をかめて実を摘んでいる農夫の姿があり、畠の境界線に植えられた、丈高く伸びた大麻が風に揺れている。沙漠の町敦煌はオアシスの町なのである。二十分程で、二晩厄介になる敦煌賓館に着く。大きくはないが、新しい蕭酒な建物で、玄関の両脇の壁の女人群像と、玄関入つて直ぐ右側の壁面を飾る、群舞する飛天の陶壁画が人目を引く。

午後、市内見物にむかう一行を見送って、部屋に落ち着く。藤原さんと約束した通り、ドアの鍵は掛けないでおく。中国を旅して一番有難かったのは、盗難の心配をしなくて済んだことであった。メ
その整理をしているうちに、いつか眠ってしまう。

「気分はどうです？」

という藤原さんの声で目覚めた時は、すでに黄昏の微光が部屋の中に漂っていた。

「おかげさまで」

「昨晚は大分咳込んでおいでだった」

「それはそれは、申訳ございませんでした。煙草を少し控えればいいんでしょうが……」

「いや、これだけはやめられませんかあ」

荷物整理の手を休めて、藤原さんは卓上のビースの箱に手を伸ばした。

「同室の方が嫌煙家だったらどうしようと、内心恐れていたんですわ。でもあなたも同じシ
ョート

ビース党で安心しました。……ところで、今晚の鳴沙山はどうされます？」

夜は沙漠の山鳴沙山と、その麓にある、いかなる時にも涸れたことがないという月牙泉の観光が

予定されていたのである。

「やめておきます」

雲を踏むような覚束なさは、依然として続いていた。

「実は月牙泉でお茶をたてようと思って、こんな物を持って来たんですよ」

藤原さんは、トランクから木箱を取り出しながら言った。驚いたことに、さほど大きくもない箱に、茶道具一式がコンパクトに収まっているのである。いずれも由緒ありげなお道具類である。「これは見事な！」と感嘆すると同時に、京都に生まれ育った人は、なんとまあ雅な心をお持ちなのだろ

うと思った。私のような野人には、到底思いもつかない風流心である。私より丁度十歳年上の藤原さんの若さの秘密はこれかと、私は羨しくなった。

「今日は確か月齢十日。月がきれいだといいですね」

慌しく一行が出掛けて行くと、私はまた独りになって眠った。夕食は一行の帰着を待ってということだったので、文字通りお預けで、眠る以外することがなかったのである。

藤原さんが部屋に帰って来たのは、八時過ぎだっただろうか。

「どうでした？」

と聞くと、

「いやあ、行かなくてよかった。あなたは先見の明があったということですよ。沙漠の山とは聞いていたが、ウドン粉みたいな細かい砂で、脚はズブズブ音も無くめり込むし、それこそ這うようにして登り、滑るようになって月牙泉へ辿り着きました。月が照っていれば、まだいくらか救いがあったんでしようが、おぼろ月では……」

全身なんとなく粉っぽく見える藤原さんは、そう言って笑った。

「で、お茶はどうされました？」

「それどころではなかった。しまいにはこれが荷物になってしまつて……」

と、口とは裏腹に、木箱は再び丁寧にトランクに戻された。

「でも一句ものして来ました。畏みて月下の山を降りにけり……。明日は莫高窟ですなあ。井上靖さんのような人ならともかく、我々のような一介の観光客には、肝心な所は見せて貰えんのでは……」

藤原さんは窓に凭ると、口にくわえたピースに、ライターの火を点じた。一瞬、ポッと小さい明りが窓にともった。

(続く)

立ち止まるな善導

〈13〉

寺内大吉

挿絵・松濤達文

枯れ葉がまねく

四

「長瀬后を見れば、その禪師が如何なる僧であるか、容易に理解できるであらう」と太宗は老臣魏激の問いに答えた。

長瀬后——文德皇后の精神形成は、ひとえに石壁山玄中寺で念仏に励む道綽禪師の導き

による、と太宗は言いきるのである。
「皇后のあのお人格を磨きあげた僧ならば、よほどの名僧ですな」

門下省長官の魏激は即座に納得した。
唐の太宗が王位に就いて十年近く、後世、
「貞観ノ治」と呼ばれた完璧な治政が実施されたわけだが、その軸芯となつて太宗の動かした智慧の源泉として文德皇后の存在を誰も



が見逃しはしない。

だからと言ってこの皇后が政治の表舞台へ姿を登場させることは殆んどない。「牝鶏の晨（あした）するは、これ家の索（つ）くるなり」の金言を守りぬいた。女が出しゃばってトキをつくれば家は滅ぶ、という意味である。ただ太宗が右するか左の道を選ぶかで迷ったとき、文德皇后は言葉少なに決断への助言をささやいた。

服飾はつねに質朴、儉約を守り、読書に励んで知性を肥やした。

じつは魏激自身も彼女の助言で首の皮一枚をつないでいるのである。

唐の高祖が天下を掌握した直後、李王家の内部で深刻な政変があった。高祖の長男で皇太子だった建成は弟の元吉と手を組み、李世民を除こうとした。同じ弟ながら李世民的抜群な武略に恐怖と嫉妬をおぼえたのである。李世民の太宗は、これを察知すると兄たちを登城する玄武門でとらえて殺してしまった。

父の高祖に退位を迫り、唐の二世太宗となった。

骨肉が血を流す酸鼻な革命に、つね日ごろは温和な文德皇后が一点も表情を曇らせなかった。

——民のことを思えば、正しい王家を確立するのが先決です。古い血は洗い流してしまいなさい。

と夫や部下の将兵を励ました。

ところで皇太子建成の側近にいたのが魏激である。隋王朝の高官だったのを、器量を見込まれて皇太子を補佐していた。

この「玄中ノ変」で魏激はとらえられて獄につながれた。いよいよ処刑という朝、太宗の前へ引き出された。

——汝、わが兄弟を離間するは、なにゆえぞ。

太宗はなじった。自分を暗殺しようとする策謀を魏激らが謀ったと信じていたからである。

——皇太子、もし臣が言に従いしならば、今日の禍いなかりしならん。

全く悪びれずに答えた。この態度に太宗は考えこんだ。処刑を午後まで延ばすことにした。文德皇后に相談したのである。

皇后は即座に答えた。

——臣従する臣だけでは王の姿は写りませぬ。王の姿を写す鏡は、心ひそかに敵対心をいだく者ではないでしょうか。

このヒントは太宗の胸へ強い楔を打ちこんだ。処刑を中止するばかりか、魏激を側近として召しかかえた。皇后の予言どおり、魏激はその後「直諫ノ士」として太宗には不可欠な人材となった。

貞観十七年、この魏激が死んだとき、太宗は、

——それ銅をもって鏡となさば、衣冠を正すべし。古をもつて鏡となさば興替（栄枯盛衰）を知るべし、人をもつて鏡となさば、得失を明らかにすべし。朕つねにこの三鏡を保

ち、もつておのれの過ちを防ぐ。今、魏激死して、ついに一鏡を失う。

と嘆き悲しんだという。

文德皇后の助言を忠実に守り、魏激の直諫をつねに鏡として、おのれの像を冷静に見つめてきたのだった。

ところで貞観十年時の魏激は、長安を出発する直前にも文德皇后が遺言めいた忠告を夫君の太宗に洩らしたのを、じかに聞いた。

——兄無忌の言葉を不用意に聞いてはなりません。血縁だからと言って王は、情に溺れることは許されないので。

——それは、どういう意味なのかな。太宗はいぶかった。

——よほどのことがない限り、文昭公ほどの人を遠ざけてはなりません。

文昭公とは太宗が王位に就いて以来、よく補佐してきた宰相の房玄齡のことである。

すでに貞観四年に死去して杜如晦とともに「貞観ノ治」の両輪とされた功臣だっ

た。「房謀り、杜断ず」と評価された。房玄齡の智略と杜如晦の決断とを指している。

ところが文德皇后の実兄である長遜無忌が宰相の椅子をねらって、房玄齡を引きずりおろす庸言をあれこれと太宗の耳へ吹きこんだ。ために老宰相は自宅に蟄居していた。

実兄という血縁にも曇らされない文德皇后の澄んだ眸。いつ誰が何処で磨きあげたのであろうか。

文德皇后は北魏王、拓跋氏の血を引く長遜家の息女だった。漢人ではない。山西の北辺にひろがる山岳地域で生きる狩猟族である。山岳の主峰が大鮮卑山だったので、彼らは鮮卑族と呼ばれた。

四世紀の後半、この鮮卑族から英傑が誕生した。父は北俗王の拓氏。母は漢の北鎮武將の娘で跋氏。珪という誕生名だったので、彼は拓跋珪と名乗った。強力な騎馬隊を駆使して四隣を制圧していった。当初は雁門関の大同府を首都としていたが、勢力の拡大につれ

て南下して山西全土を攻略、さらに洛陽までも占拠して中原に覇をとらえた。北魏朝の道武帝である。

長遜家はこの拓跋氏に仕え、血縁を結び、代々その高官の座にあった。だが北魏王が武威を誇ったのも百年そこそこで、じきに東西へ分裂する。いずれも二、三十年の命脈しか保持し得ず、東魏は北齊のために、西魏は北周の手で滅ぼされてしまった。

主家の滅亡とともに長遜家は北方の山岳地域へ帰って雌伏した。文德皇后が十三歳の折、縁あって隋朝の太原の守備司令、李淵（唐の高祖）の息子世民へ嫁いだ。じつはこの李家も純血な漢人ではない。父祖歴代の血には突厥など蕃夷の血が混入していた。

だいたい北鎮の守備に任じた彼らは、勤務のさなか、主人の王家が崩壊する悲運に見舞われるのが通例だった。首都への帰還は不能になり、そのまま現在に居坐らねばならない。蕃夷に囲こまれて生き続けるためには、

その蕃夷と通婚して鋭鋒をかわさねばならぬのである。

李世民と鮮卑の娘との通婚も当然お互いのこうした自立策がからんでいた。そして、晋祠洞の森で反乱を決断した李世民の「娘」に文德皇后の背後にひかえる鮮卑族の騎馬隊のあったことは言うまでもない。

だが、文德皇后から李世民が得たものは武力だけではなかった。彼女の家系にしみこんだ根深い仏教思想である。

仏教の中国への浸透は、敦煌から玉門関を経たルートばかりが強調されるが、これは法顯や玄奘という有名な業績に眼を奪われた結果である。西域訳経僧だけが仏法を伝えたのではない。むしろ信仰という点では無学無名、蕃衣の僧たちによる伝道教化こそ民衆の心を強く把握したはずである。ゴビ沙漠を経て雁門関から浸透してきた北魏仏教は、鮮卑族拓跋珪、明武帝の手で大同に巨大な石仏窟を造立した。ガンダーラ文明をそっくり移植

したのである。そして、そこから独自の仏法を開花させていった。

独自の仏法とは、民衆と深く結ばれた浄土——教念仏信仰である。

五

山西省の北辺を形成する五台山系。そこから長城が発して北夷の領域と境界を区切っている。この城壁は六世紀の北周時代に完成したようである。長城をくぐって北へ抜ける塞門が雁門関である。

此処を抜けた北方の地方、つまり蕃夷の領域に大同の街がある。石仏窟の雲崗はその郊外だ。

ついでのことながら現在の「万里の長城」に触れておく。

現在の長城は大同の北方に造られ、モンゴルと境界をなしている。この長城が西方へ伸びてきて合流したので、雁門関はあたかも内

城支壁の形になってしまったが、大同北方の長城は十六世紀、明の世宗が構築したものである。

この唐初、雁門関はあくまでも北夷をささぐる塞門であり、大同は異域の都であった。その北方からひろがっているゴビ沙漠の蒙塵が、胡族の恐怖を漢人たちに実感させたはずである。

その雁門からふり仰ぐと靈峰五台山が紫雲をたなびかせていた。

五台山にはこんな伝説がある。

四世紀の初め、雁門の五百戸余りが乱を避けて家族ぐるみ全員でこの山中へはいった。どこでどんな暮しをしていたのか、誰も知らない。乱が鎮静して人々は雁門の街へ戻ってきたが、彼らは誰一人姿を見せなかった。やがて搜索隊が五台山へ送りこまれた。手ごたえは全くなし、生活の痕跡すら見あたらないのである。

個人ではない。集団で蒸発してしまったの

だ。思いなしか雁門から見上げる五台山上の雲が紫雲に見えてきた。人々は「仙者之都」と呼び慣らわすようになった。

十三世紀に浙江の僧志磐によってまとめられた中国仏教史のうち「浄土立教志」は、中国浄土教の始祖として慧遠をあげている。ちなみに二祖は善導、三祖承遠、四祖法照、五祖少康、とつらなる。

慧遠も雁門の生まれである。四世紀後半から五世紀後半へかけて生きたが、その二十数年間を漢水のほとり、襄陽ですごしている。道安門下で学んだのである。しかし師の道安が死ぬと(三八五)、廬山へ籠もって「般舟三昧経」と取り組む念仏者の生活へはいる。百人を超える弟子たちも集ってきて「白蓮社」が結成される。世事俗情にまどわされない念仏ひとすじであった。

將軍桓玄がわざわざ廬山へ登ってきて、慧遠を連れ出そうとするが、微動だもしない。「沙門は王者を敬せず」と公言し、その外護

を拒絶するのである。

また桓玄が戦場にこれから臨もうとする自分をどう思うか、と問うと「王の安穩を願うが、同時に敵將の無事も祈る」と答えるのであった。

慧遠のこの浄土思想。道安門下として教義經典の研学にもよったであろうが、幼い日ふり仰いだ五台山、あの紫雲の彼方に実在する極楽浄土、体内深く泌みこんだ情操が源流となっていた事実を見逃してはならない。あえて廬山を求めた慧遠の志向が、廬山への郷愁を裏付けるであろう。

五台山は五臺とも称した。懺(らん)は「みね」と読む。

その麓で、慧遠からほぼ五十余年を隔てて一人の少年が誕生する。長じて出家した。

——曇鸞、或は懺となす。その氏は詳ならず。雁門の人。家五台山に近し。

と「伝」は書く。廬山の投影を今更うんぬんする必要もないであろう。

この曇鸞も五十の声を聞いて「再発心」する。仙經を焼却しつくして浄土教に帰したのだった。故郷の山西省へ戻り、石壁山の玄中寺に籠もる。

仙經とは、曇鸞がかねて関心を深くしていた「神仙」の靈能学だった。中国古来の占星術と仏法とを、曇鸞は何とかして結合させようと努力したようだ。江南へ出かけてゆき、梁王武帝に謁したあと、その靈能神人の陶弘景と会っている。仙經十巻を贈られたのである。

洛陽へ戻った曇鸞は訳經の權威だった菩提流支と会う。

——仏法のなかで、長生不死の法として、わが道教における仙經のようなものがあるだろうか。

曇鸞がたずねると、このインド人の訳經僧はベッと地に唾を吐きすてた。

——何という言葉ぞ。相い比べるべきものではない。どちらが長生不死であらうと、そんなことは問題にならぬではないか。かりにその効で長生きが出来たとしても輪廻をくり返すばかりだ。

そして、曇鸞に一卷の經典を手渡した。「観無量寿經」であつた。かくて曇鸞は所有していた仙經をことごとく焼き尽したという。

きわめて劇的な発心(回向)譚であるが、百五十歳も生きたというほど菩提流支の人物像は不鮮明である。この異常な長寿は、訳經者の署名を經典の成立年次と組み合わせてつないだものにちがいない。むしろそのままを受容して、曇鸞が菩提流支の訳注になる「観無量寿經」を精読し、回心を遂げたとするのが自然であらう。

曇鸞はこれに続けて、

——魏王、これを重んじて号して神鸞となす。勅を下して并州の大寺に住せしむ。

晩に復た移りて汾州の北山石壁玄中寺に住す

とある。

曇鸞の声名が中国全土で高まったのは、この北魏王ばかりではない。曇鸞が六十七歳で寂したとき(東魏・興和四年=五四二)、江南の梁王武帝が、「恒に北に向いて曇鸞菩薩を礼す」と悼んだことは前で紹介した。

だが南北の帝王から神鸞よ、菩薩よ、とあがめられても曇鸞自身は本懐ではなかったはずだ。もともとそのような現世の榮譽をかなぐり捨てた浄土願生者だからである。江南に神仙の法を求めたという事実も怪しい。曇鸞はこの住還で廬山や襄陽を訪ね、白蓮社の慧遠の旧蹟に触れているのである。

いま書いた「統高僧伝」の続く一行こそ、念仏者曇鸞のすべてを物語るのではあるまいか。つまり「石壁玄中寺に住す」に続く部分である。

——時に介山の陰に往き、徒を聚め業を蒸む。今、鸞公巖と号するは是れなり。

時に岩かげへゆき、僧俗をあつめ（聚）念仏の業をすすめ（蒸む）た。いま、鸞公岩（巖）と呼ばれているのは、その説法場跡だ、という。

いたずらに深山に籠もって下界と絶縁し、孤高を誇示したのではなかった。白壁山を求めたのは魏王らの誘いを固辞するためで、純粹に仏法を求めてくる人々は悦んで迎え入れたのである。

この曇鸞を慕って道綽禪師が玄中寺へ登ってきたのは、師の寂後七十年近い歳月が流れた隋朝の大業五年（六〇九）だった。道綽、四十八歳である。

——中に鸞の碑有り。具さに嘉瑞を陳ぶ

山中に建つ碑文を読み、「腋の師」曇鸞を讃仰しつつ念仏の道へ帰入していった、とある。

道綽も山西省の生まれだ。ただし慧遠や曇鸞と異なり、ずっと南寄りで并州汶水県の生まれである。

例によって「碑有り……云々」は劇的な表現で、道綽はすでに石壁山へ登ってくるまでに念仏者となる条件を内外から満たしていたであろう、と推測される。郷党の先師曇鸞のことは隅々まで知り尽していたはずである。

六

道綽を念仏者とさせた内外からの条件とは何であるか。

内なるものは、くり返し述べてきた山西という土地の地殻へ沁みついた「念仏する声」である。漢人、北夷、西胡の肌の色を問わず、誰もが救われたいと願う同じ人間であ

る。そこへ大同雲崗の石仏窟で描かれた仏の群れが、とりわけ第四窟の阿弥陀仏が愛の手をさしのべてくれた。誰もが呉越同舟ですがりついてゆくではないか。いわんや慧遠とか曇鸞という先師たちが輩出している。

外側にある条件とは、道綽が出家した少年期から始まった北周王朝による暴虐な「廃仏」である。

未だ少年だった道綽は直接に危害は加えられなかったが、還俗を強制される。十四歳の少年は寺から追い出されて、山西の各地を放浪するのである。この放浪生活で、ダメな人生へ足を踏み入れるか、真の求法を身に付けるかは、大きな試練だった。

道綽は挫けなかった。ひもじい明け暮れのなかで、戦乱と飢えて苦しむ人間の姿を見た。生きざまの哀しみが、空腹で刺しこむ痛苦となって道綽をとらえた。仏の愛による救いを熱望した。どんな厳格な師僧にもまさる鞭を、少年道綽は浴びたのである。

十七歳になって、北周の廃仏帝が死んだ。世は一変して隋の文帝が天下を掌握した。仏教復興をその主要政策にかかげた。いったん還俗した僧たちも寺院へ復帰してきた。道綽もその列へ加わっていた。彼は「大乘涅槃經」を生涯の研究テーマに選んだ。

一切の衆生、悉く仏性あり——釈尊は自らの死に臨んでこの平等思想を強調しているのだった。たちまち道綽は「涅槃經」研究の權威者となって、各地の寺から講説を依頼されるようになった。

しかし、道綽の心は落着かなかった。あの廃仏時よりも不安におののいていたと言える。二つの不安材料があった。

先ずは、「涅槃經」の思想自体に不安がひそむ。たしかに仏による救いは感じられるのだが、それはあくまでも理智の救いであって、情念が稀薄なのだ。愛、慈悲による救いが足りない。

さらに、これは決定的なものだったが、新

☆☆

山西の鶏念仏

ナ
モ
ア
ミ
フ
ト



たに興起した隋王朝の仏教復興と歩調を合わせて早くも僧の墮落が始まったのである。そんな悠長な時期であろうか。残された時間は余りにも少なかった。

末法の到来である。

釈尊滅後の五百年間は正法。続く千年は僧法の時代である。正しい仏法が守られ、そして形だけのものとなり、やがて千五百年目以後は末法と称して仏教が滅尽してしまうのだった。

その千五百年目が、二十余年後にやってくる。つまり隋の文帝が天下統一の業を完成した開皇八年（五八九）は仏滅後千四百七十八年目にあたると。物質的に、また世評は恵まれながら、道綽が年ごとに焦燥と不安を深めていった姿は、容易に想像できる。

遂に隋の大業五年（六〇九）すべてを捨てて道綽は石壁山玄中寺へ登った。まさしく末法到来をあと二年に控えたぎりぎりの年限であった。

「碑有り、具さに嘉瑞を陳ぶ」などという甘い情況ではなかったはずである。さらに先師曇鸞が「時に介山の陰に往き、徒を聚め業を蒸む」とした鸞公岩の教化実践を、道綽は全身全霊をこめて遂行したことであろう。末法の到来と戦わねばならない。一人でも多くの男女に念仏の功德をつたえねばならない。その妻さまじい決意のさまが、眼にうつるようである。

戒珠はその「往生伝」で書く。

——綽僧俗に念仏を勉む。数珠無き者は豆を以て之を記す。念ずる一声ごとに即ち一豆を度す。ある時は麻麦とす

一声でも多く念仏をとなえさせよう。その声で末法到来の魔火をふき消してしまうのだ。一声発するたびに豆を一粒つまんで、升へ移す。念仏の数をかぞえ、功德が厚くなることを願ったのである。

ここで「数珠無き者は」とある。すでに数珠をつまぐって念仏をかぞえる方法が常用されていた事実が明白である。小豆ばかりではなかった。麻麦を代用したこともあった。

農家の主婦がこうして塩麦で念仏をかぞえていたら鶏がかたわらへやってきた。鶏はかぞえ終えた塩麦を一粒づついばんでいった。やがて腹もふくれ、関(とき)をつくったが、コケコッコーとは鳴かず「ナモアミトーフ」(南無阿弥陀仏)と叫んだという。「山西の鶏念仏」の伝説は、道綽の名とともに広く後世へつたえられた。

道綽が念仏教化を開始したころ、文徳皇后は七、八歳であったか。

「七歳をこえた山西の男女で、念仏をとなえざる者はなし」と言われたほどの強烈な道綽の伝道であった。文徳皇后も当然、少女時代から念仏に励んだはずである。

にもかかわらず「資治通鑑」らの唐書は、皇后の婦徳に筆を尽して賞讃を与えるが、そ

の源泉を儒教倫理に固定し、浄土教の影響から故意に遠ざかろうとする。これら史書の成立自体が、儒教宣揚を目的としたから当然だったとも言える。しかし文徳皇后の浄土教への篤信はまぎれもない事実で、唐末の金石文にもそれが明記されている。

——文徳先皇、聆神鏡版祠之勳、嘉道綽大師精修禪觀 躋淨界之風

婦徳高い文徳皇后は道綽大師に付いて仏法を学び、とりわけ浄土思想は深く身につけた、という意味であろう。

だからこそ愛する皇后の病状悪化(不予)を見た唐の太宗は遙々山西の地へ駒をすすめ、石壁山玄中寺へ登ったのである。この記事も金石文にある。

——太宗昔幸北京、文徳皇后不予。輦過蘭若、礼謁禪師綽公。便解衆宝名珎、供養啓願、



王衣旋復金勝遂開、因詔云々

太原（北京）へ出かけた太宗は石壁山へ登り（輦過蘭若）道綽禪師に礼詔した。仏を礼し供養、皇后の平癒を祈願した、という意味である。

すでに曇鸞の仙經の箇処で語っておいたように、いたずらな長生不死は浄土教家のえらぶところではない。おそらく道綽はこの祈願に文徳皇后が浄土願生をいっそう強める忠言で答えたはずである。

すでに「禪觀を精修し、浄界に躋るの風を嘉す」という西方信仰に到達していた文武皇后である。別離を悲しむ迷いはなかったはずである。

道綽禪師と太宗との会談は、ことこまかに善導へつたえられた。若い吏生の王徐明からである。

王徐名はこの太原行に書記として魏激長官

に随行していったのである。

「それで道綽禪師とは、どのようなお方だったかな」

善導は實際寺を訪ねてくれた王徐明と柿の木のある庭を遊歩しながら訊いた。

「どういうお方かと申しても……さようございます。私どもが参る数日前に新しく歯が一本、生えてこられたそうです」

そんな奇瑞で道綽の人柄を表現しようとする。

「赤子のような歯が生えてきたのか」

「はい」

「禪師はお幾つかな」

「七十歳とかおっしゃっていました。余り沢山念仏をとなえすぎたので、口中に功德が満ち満ちて……」

「新しい歯が、なあ」

善導は何としてでも石壁山へゆかねばならぬ、一刻も早く、と自分に言いきかせた。

（つづく）

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由 (生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま)
- 一、枚数 四百字用紙五〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十一巻 七月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六十年六月二十五日 印刷
昭和六十年七月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒(三) 振替東京八一八二一八七番

(新)

(刊)

南無阿弥陀仏

『極楽浄土を想い観る』

浄土教聖典 観無量寿経を読む

定価 一二〇〇円

〒二五〇円

著者

大正大学名誉教授・文博

竹 中 信 常

父の殺害を企て母を牢獄に幽閉する非道の王子阿闍世^{アジャセ}。絶望と悲歎の底から救いを求める母韋提希夫人^{イダイカ}。その壮絶な人間ドラマを背景に展開される極楽浄土とは……。悩み、悲しみ、迷う現代人に贈る阿弥陀如来の世界がここにある。

山手書房

〒112 東京都文京区後楽二―二―一〇松屋ビル

電話 〇三(八一五) 七四八六(代) 振替 東京七―五四〇―一八

第五十一卷

七月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十年六月二十五日印刷 昭和六十年七月一日発行